

2016/1/9 第7回明治大学科学コミュニケーション研究所サイエンスカフェ

「血液型性格を信じる人々：一般人から学者まで」

話題提供者 山岡重行 (聖徳大学心理学科)

0, 1999年～2014年にかけての血液型性格判断を巡る社会の動き

- 1999年 1970年代の半ばごろから20年以上にわたって続いてきた大衆の中での第二の血液型(血液型性格判断)ブームは1990年代の後半になって、週刊誌などの誌面を賑わしていた関連記事も減り、書店の本棚から関係コーナーも消え、1999年1月現在ではどうやら終局を迎えたように思われる(白佐,1999)。
- 2004年 2004年2月21日から約1年間、約70本もの血液型性格関連説に関するTV番組が放送された。これらの番組では血液型と性格の関連を肯定していた。放送倫理・番組向上機構(略称BPO)から勧告が出された結果(2004年12月)、2005年2月でこうした番組はほとんど放送されなくなった(上村・サトウ,2006)。
- 2008年 2007年9月に「B型自分の説明書」が出版され、「血液型自分の説明書」シリーズは累計540万部を突破するベストセラーになり、2008年12月にはDSソフト「みんなで自分の説明書～B型、A型、AB型、O型～」まで発売された。
(2012年 「続B型自分の説明書」など続編が出版されるがたいして話題にならず。)
- 2014年 縄田健悟(現九州大学)「血液型と性格の無関連性：日本と米国の大規模社会調査を用いた実証的論拠」が心理学研究に掲載され、新聞社会面等で紹介される。

1, 血液型と性格の関係

奈良信雄(2009) 東京医科歯科大学 臨床血液学・遺伝子診断学

「血液のふしぎ」SoftBank Creative サイエンス・アイ新書 p.93

「血液型というのは血球の表面にある血液型物質と呼ばれる成分で血球のタイプを分けるものです。これまでの研究によれば、少なくとも50を越える血液型が発見されています。それぞれの血液型は1～4種類くらいあります。となれば、1～4の50乗という天文学的な数字になってしまいます。それをABO血液型だけで、人を単純に4つに分類するのはいかがなものでしょうか？」

また、ABO血液型を決定づける血液型物質は赤血球の他にも唾液腺や膵臓、腎臓、肝臓、はい、精巣などにもありますが、性格と大きく関連するはずの脳にはありません。」

白血病を患っていた市川團十郎が妹から骨髄移植を受け2008年12月に復帰した。A型からO型に変わったが性格が変わったとは思えない。」血液型と性格の間に関係が無いことを証明する一例ではないか？」

山本文一郎(2015) ホセ・カレーラス白血病研究所主任研究員 糖鎖合成酵素の分子遺伝学

「ABO血液型がわかる科学」岩波ジュニア新書 p.202

「ABO血液型の抗原は赤血球の表面だけでなく、皮膚や毛髪、胃や大腸などの消化器の細胞、それに血管の内膜をつくる細胞にも発現しています。また、分泌型の人では唾液や精液にも分泌されます。しかし性格に一番関係しているような、神経系の細胞には、あまり発現していないようなのです。中略

ABO血液型の違いによって、神経細胞でも変化が起こってもおかしくは無いと思います。でも、実際には、ABO血液型の違いによって、その抗原の発現に違いがあるような神経細胞はほとんど知られていないのが現実です。ABO血液型と性格になんらかの関係があるとすれば、神経細胞以外の細胞の貢献の方が可能性としては高いかも知れません。中略

性格についても、きちんとした定義をした一面や一特徴について、ゲノム・ワイド相関実験で300万個の一塩基多型の箇所を調べ、ABO血液型遺伝子の中にある一塩基の多型との間に強い相関が認められれば、ABO血液型と性格が関連すると結論づけることが出来ます。あまり遠くない将来にその答えが見つかるはずです。」

小塩真司(2011) 現早稲田大学 パーソナリティ心理学 発達心理学

「性格を科学する心理学の話」新曜社

「最近の研究では、性格のゲノムワイド関連分析が行われており、性格を(完全に規定するものではなく)一定の範囲で規定する遺伝子が見つかってきています。

ABO式血液型の遺伝のメカニズムは、学校の教科書にも書かれるほどよく知られています。ですから、もしも血液型と性格の関連が明らかに存在するのであれば、ゲノムワイド関連分析で簡単に見つかるはずなのです。しかし残念ながら現在のところ、性格との関連が見つかった遺伝子は、ABO式血液型とは関係のないものばかりです。もしも、血液型が性格と明らかに関連するようであれば、ゲノムワイド関連分析によって、真っ先に見つかってもおかしくありません。

ときどき『心理学では血液型と性格の関連を調べないのですか?』ときかれることがあります。しかし現在は、直接的に遺伝子と性格の関連すら調べるようになってきているのです。なぜ今さら、血液型との関連を調べなければいけないのでしょうか。」

→血液型と性格の関連を示す根拠は無い。

遺伝子レベルでABO式血液型と性格が直接関連する可能性も現段階では極めて低い。

血液型性格は現段階では疑似科学以上のものではない。

2. 血液型性格を信じる人々

① 血液型性格判断の熟知度と確信度

方法 調査対象者 首都圏私立大学5校の大学生8473名(男性2878名,女性5571名,未記入24名)。
 年齢 18~79歳 平均20.043歳(SD=5.015)。

手続 血液型性格判断の熟知度として「各血液型の性格の特徴や血液型による相性をどの程度よく知っているか」を、1;全く知らない~4;よく知っている、の4件法で、また血液型性格判断の確信度として「血液型性格診断をどの程度信じているか」を、1;全く信じていない~4;信じている、の4件法でそれぞれ回答させた。調査は1999年4月,2001年4月,2002年4月,2004年4月,2005年1月と5月,2009年4月,2010年4月,2012年4月,2014年4月に実施した。

Table 1 血液型性格判断の熟知度, 回答者の人数(%)及び平均点

	1999年	2001年	2002年	2004年	2005年1	2005年4	2009年	2010年	2012年	2014年	合計
まったく知らない	N 122	64	100	24	10	44	38	9	42	20	473
	% 9.40%	6.70%	7.90%	5.00%	2.70%	3.20%	4.10%	2.80%	3.80%	5.20%	5.60%
あまり知らない	N 368	258	379	107	66	268	180	90	238	128	2082
	% 28.30%	27.20%	29.80%	22.30%	17.60%	19.70%	19.50%	27.80%	21.60%	33.60%	24.60%
少し知っている	N 707	537	690	299	221	850	560	191	660	212	4927
	% 54.40%	56.50%	54.30%	62.30%	58.90%	62.50%	60.50%	59.00%	59.90%	55.60%	58.20%
よく知っている	N 103	91	102	50	78	198	147	34	161	21	985
	% 7.90%	9.60%	8.00%	10.40%	20.80%	14.60%	15.90%	10.50%	14.60%	5.50%	11.60%
合計	N 1300	950	1271	480	375	1360	925	324	1101	381	8467
	% 100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
	M 2.609	2.690	2.625	2.781	2.979	2.884	2.882	2.775	2.854	2.614	2.759
	SD 0.765	0.736	0.743	0.693	0.701	0.677	0.710	0.674	0.703	0.673	0.727

血液型性格熟知度の1要因分散分析 $F=27.813, df=9/8457, p<.001$
 Bonferroni法の多重比較 2005年1月 > 1999・2001・2002・2004・2014
 > 2010 > 1999・2002
 2005年5月・2009・2012 > 1999・2001・2002・2014

Table 2 血液型性格判断の確信度, 回答者の人数(%)及び平均点

	1999年	2001年	2002年	2004年	2005年1	2005年4	2009年	2010年	2012年	2014年	合計
まったく信じない	N 161	115	167	35	26	138	139	43	161	60	1045
	% 12.40%	12.10%	13.10%	7.30%	6.90%	10.10%	15.00%	13.30%	14.60%	15.70%	12.30%
あまり信じない	N 376	269	357	117	86	350	270	109	357	127	2418
	% 28.90%	28.30%	28.10%	24.40%	22.90%	25.70%	29.20%	33.60%	32.40%	33.30%	28.60%
少し信じている	N 605	444	592	247	201	658	409	139	493	167	3955
	% 46.50%	46.70%	46.60%	51.50%	53.60%	48.40%	44.20%	42.90%	44.80%	43.80%	46.70%
信じている	N 158	122	155	81	62	214	107	33	90	27	1049
	% 12.20%	12.80%	12.20%	16.90%	16.50%	15.70%	11.60%	10.20%	8.20%	7.10%	12.40%
合計	N 1300	950	1271	480	375	1360	925	324	1101	381	8467
	% 100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
	M 2.585	2.603	2.578	2.779	2.797	2.697	2.523	2.500	2.465	2.423	2.592
	SD 0.857	0.860	0.867	0.810	0.795	0.854	0.884	0.849	0.840	0.838	0.858

血液型性格確信度の1要因分散分析 $F=12.814, df=9/8457, p<.001$
 Bonferroni法の多重比較 2004・2005年1月 > 1999・2001・2002・2005・2009・2012・2014
 2005年5月 > 1999・2002・2005・2009・2012・2014
 2004・2005年1月 > 2001 > 2012・2014
 2004・2005年1月 > 1999 > 2012



Fig. 1 血液型性格熟知度の変化

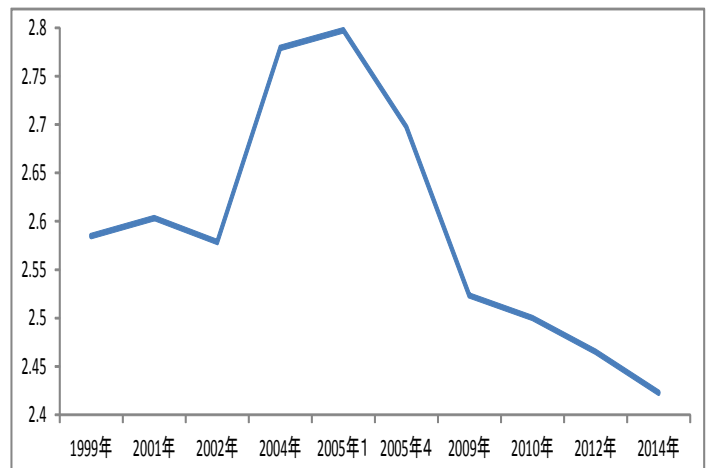


Fig. 2 血液型性格確信度の変化

熟知度と確信度の相関係数, $r=.390$ ($p<.001$)。

② 血液型性格判断を信じる理由と信じない理由 自由記述と評定平均

方法 1999年4月, 2005年5月, 2009年4月の調査では, 確信度の質問に「信じている」及び「少し信じている」と回答した者は信じる理由を, 「あまり信じていない」及び「全く信じていない」と回答した者は信じない理由を自由記述によりそれぞれ回答してもらった。

Table 3 信じる理由の分類

	度数	%
1;自分や周囲の人間に当てはまる。生活の中で実感する。経験上そう思う。 当たらないところもあるが当たっているところもある。自分の血液型を当てられた。	1410	67.1
2;他者の血液型を当てることができる。当てたことがある。	82	3.9
3;同じ血液型の人には共通する性格や行動のパターンがある。	153	7.3
4;相性の善し悪しがある。友人には☆型が多い。☆型とは合わない。	93	4.4
5;多くの人信じている。マスコミでよく言われている。そういったことを信じやすい。	49	2.3
6;遺伝や体質など何らかの生物学的影響があると思う。他の占いよりは根拠がありそう。	63	3.0
7;楽しいから。話題として盛り上がるから。占いが楽しいから。良いことだけ信じる。	81	3.9
8;本の影響。たくさん本が出ている。雑誌にもよく載っている。本の内容が当てはまる。	96	4.6
9;TVの影響。TVの実験や調査結果を見て。TVで言っていた特徴が当てはまる。	75	3.6
$\chi^2=6695.282$, $df=8$, $p<.001$	合計	2102 100.0

Table 4 信じない理由の分類

	度数	%
1;自分や周囲の人間に当てはまらない。他の血液型っぽいと言われる。 当たっているところもあるが当たらないところもある。血液型を当てられたことがない。	182	14.5
2;人間の性格は4つに分類できるほど単純ではない。人それぞれの性格がある。 同じ血液型の人全員同じ性格のはずがない。血液型もABOだけではない。	284	22.7
3;同じ血液型でも性格が異なる人が多い。違う血液型でも性格が似ている人がいる。	93	7.4
4;相性は血液型に関係がない。相性が悪いとされる型の友人がいる。	28	2.2
5;血液型と性格は関係しない。性格は環境によって形成される。	262	20.9
6;科学的な根拠・証明がない。日本だけの俗説・迷信・占い・遊びだから。 本によって各型の特徴が異なるなど一貫性がないから。	256	20.5
7;興味がない。知らない。	52	4.2
8;誰にでも当てはまる項目。他の血液型の特徴も自分に当てはまる。 暗示にかかって信じ込んでいるだけ。思い込み過ぎない。	64	5.1
9;血液型で性格を判断したくない・されたくない。差別・偏見・先入観だから。	30	2.4
$\chi^2=659.144$, $df=8$, $p<.001$	合計	1251 100.0

方法 自由記述の結果をもとに血液型性格判断を信じる理由と信じない理由に関する質問項目を作成した。自由記述と同様に確信度の質問に「4:信じている」及び「3:少し信じている」と回答した者には9項目の信じる理由がどの程度当てはまるかを, 「2:あまり信じていない」及び「1:全く信じていない」と回答した者には9項目の信じない理由がどの程度当てはまるかを「1:全く当てはまらない~4:とても良く当てはまる」の4件法で回答してもらった。調査は2010年, 2012年, 2014年に実施した。

調査対象者 山岡の心理学関連の授業を履修する大学生 1811名(男性 474名, 女性 1337名, 未記入1名)。
年齢 18~79歳 平均 24.5042歳 (SD=10.289)。

Table 3 信じる理由の平均とSD

	度数	平均	SD
1,血液型の特徴が自分や周囲の人間に当てはまるから	959	3.023	.735
2,他者の血液型を当てることができるから	959	2.129	1.511
3,同じ血液型の人には共通する性格や行動パターンがあると思うから	959	2.815	.940
4,自分と相性が良い血液型、相性が悪い血液型があるから	959	2.092	1.051
5,マスコミや世間の人々がよく言っているから	959	2.091	.975
6,血液型と正確には遺伝や体質など何らかの生物学的根拠がありそうだから	959	2.160	.951
7,話題として盛り上がり楽しいから	959	2.763	1.181
8,血液型性格の本がたくさん出ており、本の内容が当てはまるから	959	2.565	1.719
9,テレビでやっていた実験や調査結果を見たから	959	1.919	.926

Table 4 信じない理由の平均とSD

	度数	平均	SD
1,血液型の特徴が自分や周囲の人間に当てはまらないから	855	2.619	.927
2,人それぞれの性格があり人間の性格は4つに分類できるほど単純ではないから	855	3.522	.778
3,同じ血液型でも性格が異なる人や違う血液型でも性格が似ている人がいるから	855	3.504	1.582
4,相性と血液型は関係がないから	855	3.154	.921
5,性格は環境によって形成されるのであり血液型は関係しないものだから	855	3.177	.896
6,科学的な根拠や証明がない俗説・迷信だから	855	2.966	1.000
7,興味・関心がないから	855	2.418	2.347
8,他の血液型の特徴でも自分に当てはまるものがあり誰にでも当てはまる内容だから	855	3.243	.910
9,血液型性格は差別・偏見・先入観だから	855	2.705	2.705

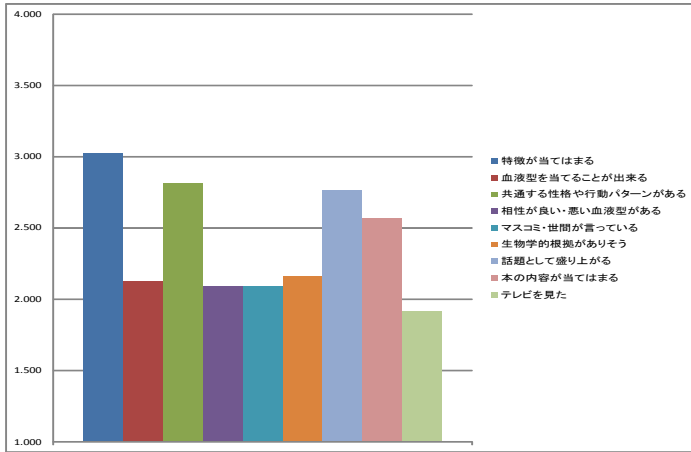


Fig. 3 血液型性格を信じる理由

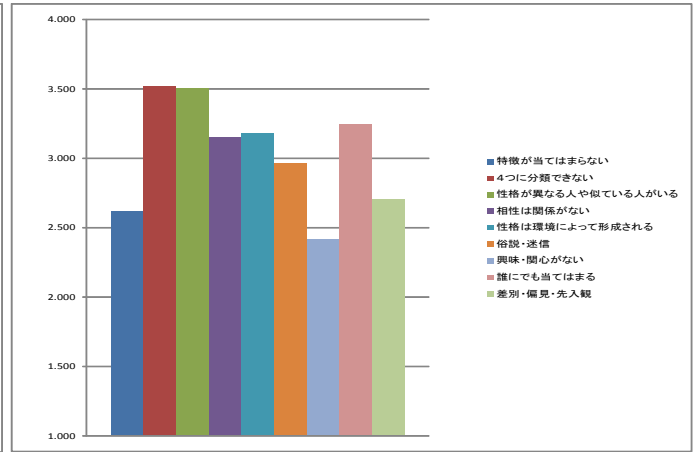
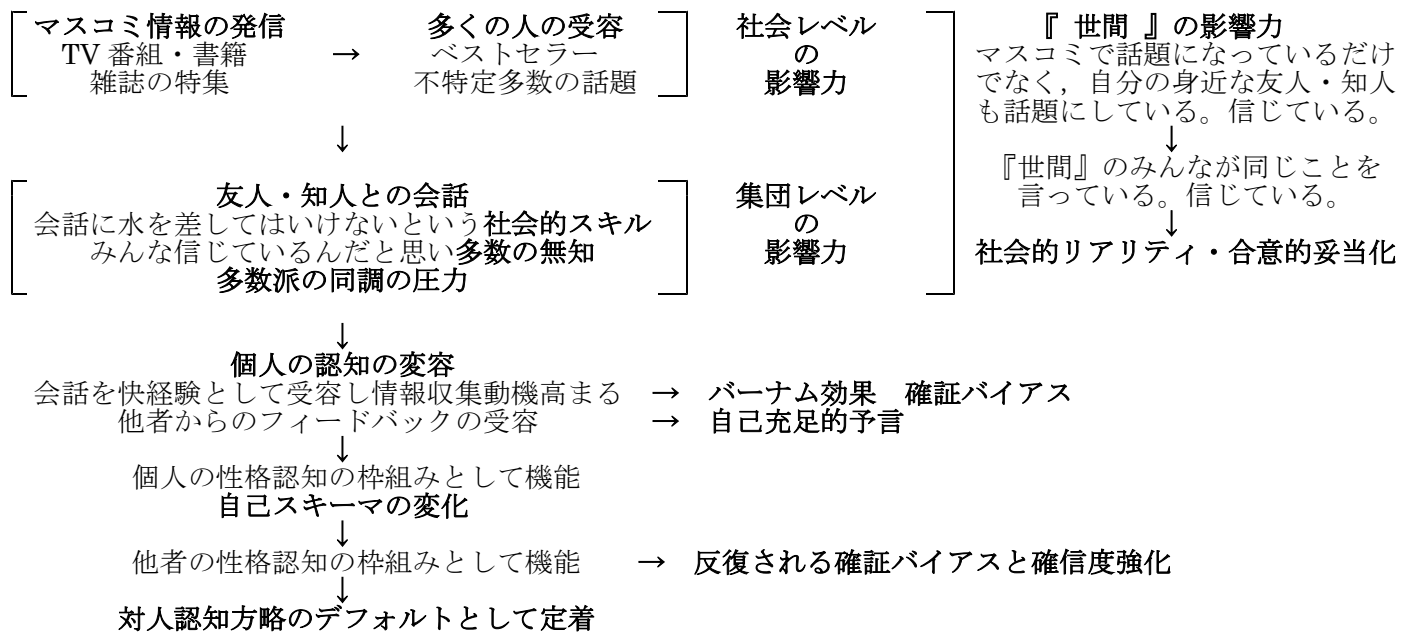


Fig. 4 血液型性格を信じない理由

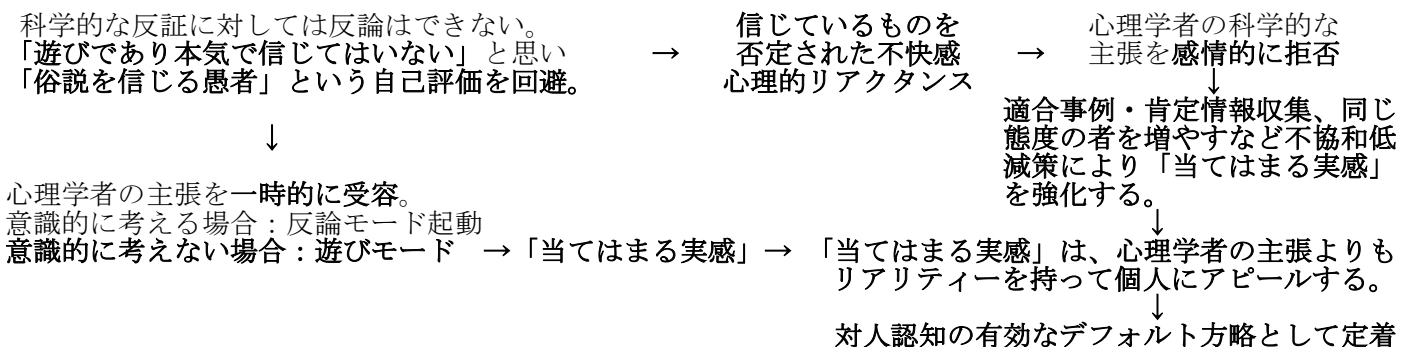
→異なる調査方法でも、血液型性格判断を信じる最大の理由は、「血液型の特徴が自分や周囲の人間に当てはまるから」であることが示された。
 それに対して、信じない理由は、「人それぞれの性格があり人間の性格は4つに分類できるほど単純ではないから」、「性格は環境によって形成されるのであり血液型は関係しないものだから」、「他の血液型の特徴でも自分に当てはまるものがあり、誰にでも当てはまる内容だから」と、性格そのものについて、あるいは血液型性格の内容について論理的に考えると信じられないという理由と、「同じ血液型でも性格が異なる人や違う血液型でも性格が似ている人がいるから」、「相性と血液型は関係がないから」という日常生活での実感として信じられないという理由の2つに大別できる。

③ 血液型性格判断に関する受容・確信過程モデル



3. 科学的な反証に出会った場合の反応：なぜ心理学者の主張は届かないのか？

① 一般の人々の場合



② 血液型性格判断を信じてしまう知識人

<医学博士（感染免疫学・寄生虫学） 藤田紘一郎氏の場合>

専門領域における血液型による様々な差異の認識

血液型性格関連説：血液型とは性格や体質が作られる先天的な材質。この材質は何らかの形で性格にも関わっている。（能見）
「私は能見氏の見解に全く賛同する。」

↓

ABO 血液型物質が人間の成長や発育、精神の形成においても、それぞれの血液型ならではの方向に誘導していくのではないかと。血液型と性格が全く無関係とする方が、かえって不自然。血液型による免疫力の強さ（O>B>A>AB）により、「積極性-消極性」、「大胆-慎重」などの行動傾向が生じる。

+

血液型の発生に関する藤田氏の仮説：「人間が生活環境に適した体質に変化していったとすれば、人間性や性格も影響を受け、それを遺伝子に受け継いでいても不思議ではないはず。」
O：狩猟民族の生活スタイルと、免疫力の強さから細かいことにこだわらず大胆で自信にあふれる性格になった。
A：農耕民族の生活スタイルと、病気の原因となるストレスを回避するため協調的で神経が細かく几帳面になった。
B：遊牧民族の生活スタイルから常識や慣習にとらわれず斬新な発想をするようになった。
AB：A 型人種と B 型人種の混血による突然変異。A と B それぞれの特性を使い分けるため、二重人格や天才型になる。

↓

「自分の中では論理的に一貫性を持ったもの、科学的な根拠のある説として血液型性格判断を確信していく。」

← 科学的な事実としての血液型による差異

← 能見に関して「長い間膨大な資料を観察することで明らかな傾向が見えてくるはず」と一定の信頼を表明している。調査結果が公表されていないことや、調査対象の人数が「のべ人数」であることを知らない？

古川説と一致

← 「O と B は積極型、A と AB は消極型」

← 各血液型の性格に関しては、古川～能見の説をもとに現在よく言われる特徴を取り入れていく。
「自分の専門領域から考えて☆型は・・・の性格を持つようになる」ではない。
「☆型は・・・と言われる。それは血液型発生時の生活スタイルと免疫力から☆型は・・・になっても不思議ではない。」
各血液型の特徴（結論）が先にあり、自分の専門知識から後付けの説明を加えただけである。

さらに、藤田氏が主張する狩猟民族、農耕民族、遊牧民族と血液型の対応は自然療法医「ダダモ博士の血液型健康ダイエット」のパクリと思われる。

藤田氏の心理学者に対する反応（藤田,2008）

多くの心理学者の先生方によると、「血液型と性格は関係がないとは言えないが、科学的な根拠もないために関係があるとも断言できない」といっています。

血液型と性格の関係を研究している『血液型人間総合研究所』代表の能見俊賢氏は「血液型は性格や体格が作られる上での先天的な要素であり、要素の違う人が同じように育つでしょうか？生まれつき備わっている先天的な要素は何らかの形で性格にも関わっていると考える方が自然です」といっています。

私は能見氏の考え方に賛同しています。

→心理学者の研究に基づいた主張を、能見親子の『研究』と同レベルのものに見なしている。

科学的に「関係があることの証明」と比較すると「関係がないことの完全な証明」は極めて困難であることを知ってか知らずか、心理学者の結論を「肯定でも否定でもない」と自分に都合良く解釈している。

→藤田氏は「科学的に血液型により様々な差異がある実感」が強いため、血液型と性格に関して明らかに確証バイアスを起こしている。

<理学博士（生物学・発生生物学） 浅尾哲朗氏の場合>

日本人の性格に興味を持つようになったのは20年前『いい名前悪い名前』という実用書を読んだことが切っ掛け。触発されたが、名前の関わる部分は性格の全部ではないとも気づき、性格にやはり関わりを持つらしい血液型と組み合わせる必然性を感じた。

↓

浅尾氏の性格理論：血液型で規定されるのは思考パターン。

情緒的な気質は名付けられた名前の母音により規定される。

血液型によりシナプスの形成されやすさ、脳内の興奮の流れる主要なルートが異なるために思考パターンが異なるという仮説。

O：現在おかれた環境からの感覚情報に反射的に反応する後頭葉型。冷静で感情的ではなく、環境に依存し意志決定する。

A：過去経験を次の行動の指針とする側頭葉型。シナプスが形成されやすく衝動が抑制されやすい。

B：過去や現在に縛られずやりたいことをやる前頭葉型。シナプスが形成されにくく、抑制が弱く衝動的に行動する。

AB：A 型のパターンと B 型のパターンを使い分けるため二面性があるように見える。

↓

「科学的な根拠のある説として浅尾式血液型性格判断を確信。」

← 始まりは実用書に影響されたこと。専門分野の知見は無関係。俗説を素朴に受容している。

← 仮説を積み重ねたもので、実証データはほぼ無い（A と O に関しては MRI の裏付けがあると書いてある←これも2004年の血液型関連のTV番組での実験ではないかと思われる）。A は抑制型、B は衝動型という結論が先にあり、自分の専門知識から後付けの説明を加えただけである。

浅尾氏の心理学者に対する反応 (浅尾,2004)

性格を扱うのを本業とする心理学者は完全否定の立場を取り、特に大村政男氏は古川・能見説の不備を指摘しつつ、「血液型-性格説」という錯覚を国民に植え付けたと両氏を批判し、なかばこの論争は決着を見たかのような状態であった。確かにデータ処理・統計処理に不備はあったかもしれない。しかし結論を導く過程の技術に問題ありという理由だけで「血液型-性格」説を完全否定することは短兵急すぎるのではないだろうか。

後になって振り返れば不備とか問題とかはどんな分野でも山ほど出てくるのは常である。個人の欠点を挙げつらい、死者にむち打つような仕事をライフワークにするようなまねは慎みたいものだ。微かな事象や密かな傾向を感じ取る感覚は、科学者というより人間あるいは生き物として必須な能力なのではあるまいか。

先の心理学者を含め、大半の学者や研究者は否定論者である。その論拠は、血液型を決めているのは単なる物質である、性格のような複雑な精神活動と関連があるはずがない、第一教科書の何処にも書いてないではないか、そんな論文は先進国のどこからも送られてこないではないか、そんなことを扱うのは迷信好きの無知な大衆であり、神聖な学者が取り組むものではない・・・といったところだろう。

科学はもともと、自分の目で観察し、肌で感じ、疑問を抱き、解決していく姿勢から始まる。疑問や知識を教科書や論文からだけに頼る学者や研究者が、本当に科学的な精神活動をしているのか疑わしい。

浅尾氏の性格観：「性格形成の原因となるのは血液型や名前の音の高さ、生活環境などで、手相、顔相、筆跡などは形成された性格から派生する結果である。」 → ？！

知識人 「自分が俗説に騙されるわけがない」

↓
自分の知識を総動員して理論武装

↓
より科学的・理論的なものとして確信度強化

↓
自説を公表し賛同者を獲得

↓
「みんなが納得し確信するものは本物だ」

→ 合意的妥当化

→ 社会構成主義

騙された被害者だった者が
騙した加害者をサポートし
新しい加害者になっていく。

→対人認知のデフォルト方略を入れ替えることは困難。

対人認知のデフォルト方略を入れ替えるためには、根拠となる肯定情報を遮断し、否定情報を反復的に入力することが必要。またオプションの反論モードを強化するためには、「血液型性格判断は差別であり有害である」ことを反復的に入力することで、デフォルト方略を意識的に抑制させることが必要だろう。

4. 血液型性格を信じる人たちの意識：血液型嫌悪と血液型差別

調査目的

ある特定の身体的特徴を持つ人達を否定的に扱うことは明らかな差別である。血液型は本人の意志で選択できない身体的特徴の一つである。従って、血液型で他者を否定的に扱うことは差別である。山岡(2011)は血液型のイメージの良さと血液型性格による不快体験率が対応していることを報告している。すなわち血液型のイメージが良くなれば不快体験率は低下し、イメージが悪くなれば不快体験率は高くなるのである。本研究の目的は嫌いな血液型、自分とは相性が悪い血液型があると回答した者と無いと回答した者を比較し、血液型差別を生み出す要因を検討する。

調査対象者 山岡の心理学関連の授業を履修する大学生 1811 名(男性 474 名、女性 1337 名、未記入 1 名)。
年齢 18 ~ 79 歳 平均 24.5042 歳 (SD=10.289)。

①血液型性格受容度と嫌いな血液型

血液型性格判断熟知度と確信度の合計点(最低2~最高8)が6点以上の者を血液型性格判断高受容群(n=842)、5点以下の者を血液型性格判断低受容群(n=966)とした。

Table 5 血液型受容度と嫌いな血液型

	A型	B型	O型	AB型	無し	合計
低受容群 度数	19	71	11	51	808	960
%	2.00%	7.40%	1.10%	5.30%	84.20%	100%
高受容群 度数	57	176	24	102	480	839
%	6.80%	21.00%	2.90%	12.20%	57.20%	100%
合計 度数	76	247	35	153	1288	1799
%	4.20%	13.70%	1.90%	8.50%	71.60%	100%

Table 6 血液型受容度と嫌悪群

	低受容群	高受容群	合計
嫌悪群 度数	153	360	513
%	29.80%	70.20%	100%
非嫌悪群 度数	808	480	1288
%	62.70%	37.30%	100%
合計 度数	961	840	1801
%	53.40%	46.60%	100%

Table5 で無しを選択した者を非嫌悪群
いずれかの血液型を選択した者を嫌悪群
とした。

$$\chi^2=159.646, df=1, p<.001$$

→血液型で他者を嫌悪するには、血液型性格の知識と確信が必要。

②嫌いな血液型の有無と血液型イメージ

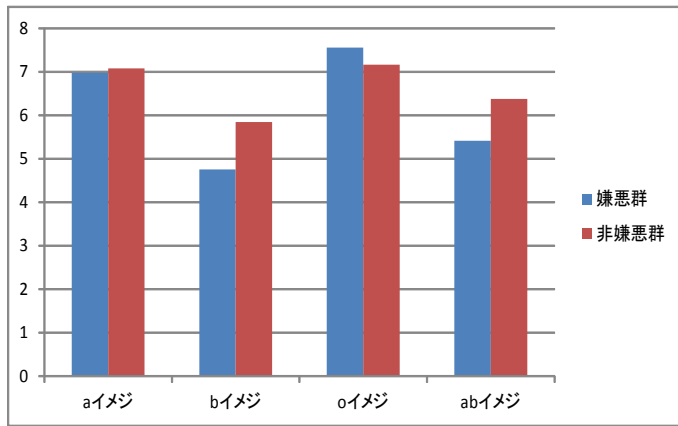


Fig. 5 嫌いな血液型の有無と血液型イメージ

A 型以外は有意差あり。

→嫌悪群は非嫌悪群と比べると各血液型イメージの差が極端である。

→嫌悪群の方が、非嫌悪群よりも単純化されたイメージである血液型ステレオタイプが強い。

③不快経験に及ぼす回答者の血液型と嫌いな血液型の有無の効果

自由記述調査方法

1999 年 4 月, 2005 年 5 月それに 2009 年 4 月の調査では, 血液型性格判断による「何らかのいやな思い・不快な経験」をしたことがあると回答した者には, その経験の内容をそれぞれ簡単に書いてもらった。

Table 7 血液型性格診断による不快経験の内容と報告者の人数 (%)

	A型	B型	O型	AB型	全体
マスコミ情報が不快	24(7.7)	32(7.2)	14(7.6)	5(3.1)	75(6.8)
不快発言	100(31.9)	155(34.7)	63(34.1)	61(37.7)	379(34.2)
☆型嫌悪	39(12.5)	5(1.1)	20(10.8)	4(2.5)	68(6.1)
性格の決めつけ	82(26.2)	36(8.1)	44(23.8)	21(13.0)	183(16.5)
差別・苛め	19(6.1)	158(35.3)	22(11.9)	51(31.5)	250(22.6)
その他	10(3.2)	24(5.4)	7(3.8)	7(4.3)	48(4.3)
不快体験報告者 計	274(87.5)	410(91.7)	170(91.9)	149(92.0)	1003(90.6)
不快体験者 計	313(100)	447(100)	185(100)	162(100)	1107(100)

自由記述の回答を基に、「自分の性格や誰かとの相性についてのマスコミ情報が不快だった」、「血液型のために悪印象を持たれたり不快なことを言われた」、「特定の血液型の人と相性が悪かったり不快な目に遭わされた」、「血液型のために自分の性格を決めつけられた」、「血液型のために嫌われたり仲が悪くなった」、「血液型のために偏見をもたれたり差別されたりいじめられた」の 6 項目の不快経験の頻度を、「1; 全くない~4; とてもたくさんある」、の 4 件法でそれぞれ回答させた。

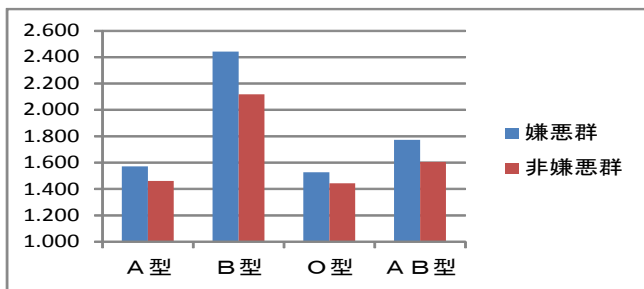


Fig. 6 マスコミ情報が悪かった

回答者の血液型の主効果 $F=54.731, df=3/1705, p<.001$
 嫌いな血液型有無の主効果 $F=10.008, df=1/1705, p<.01$
 交互作用 $F=1.170, df=3/1705, ns$

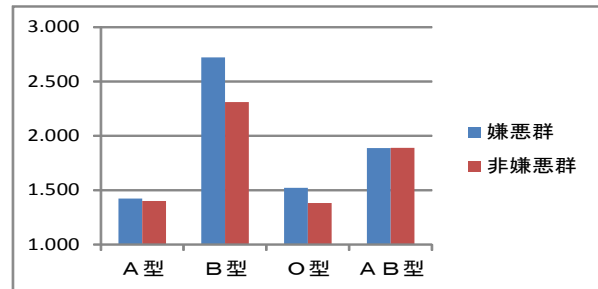


Fig. 7 不快なことを言われた

回答者の血液型の主効果 $F=115.119, df=3/1705, p<.001$
 嫌いな血液型有無の主効果 $F=7.253, df=1/1705, p<.01$
 交互作用 $F=33.372, df=3/1705, p<.05$

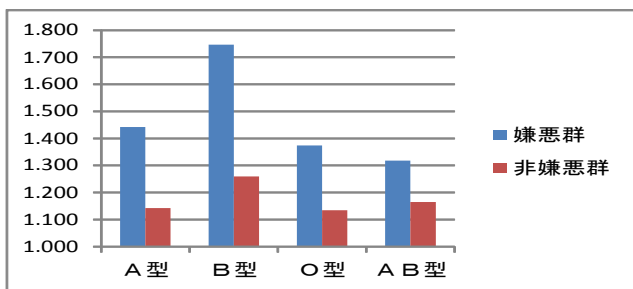


Fig. 8 不快な目に遭わされた

回答者の血液型の主効果 $F=10.307, df=3/1705, p<.001$
 嫌いな血液型有無の主効果 $F=59.319, df=1/1705, p<.001$
 交互作用 $F=2.942, df=3/1705, p<.05$

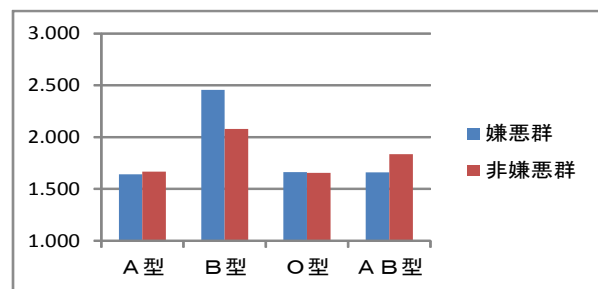


Fig. 9 性格を決めつけられた

回答者の血液型の主効果 $F=28.817, df=3/1705, p<.001$
 嫌いな血液型有無の主効果 $F=0.606, df=1/1705, ns$
 交互作用 $F=3.557, df=3/1705, p<.05$

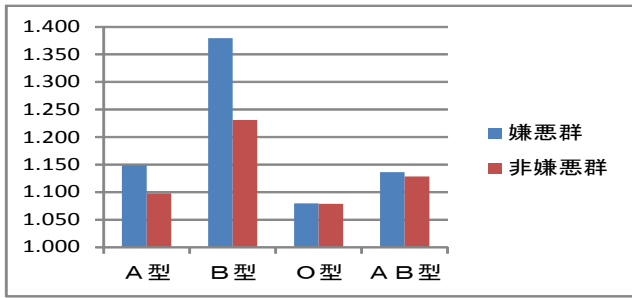


Fig. 10 嫌われた
 回答者の血液型の主効果 $F=14.381, df=3/1705, p<.001$
 嫌いな血液型有無の主効果 $F=3.442, df=1/1705, p<.10$
 交互作用 $F=1.550, df=3/1705, ns$

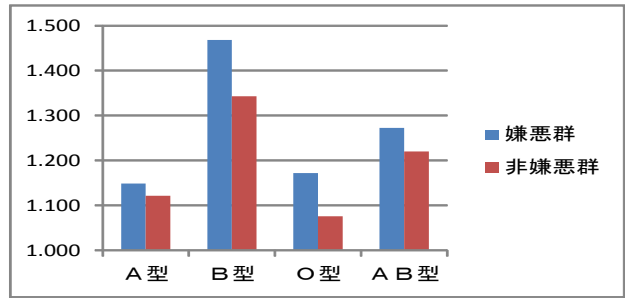


Fig. 11 差別された
 回答者の血液型の主効果 $F=18.555, df=3/1705, p<.001$
 嫌いな血液型有無の主効果 $F=5.083, df=1/1705, p<.05$
 交互作用 $F=0.641, df=3/1705, ns$

→血液型差別の被害は B 型に集中していることがわかる。では誰が差別しているのか。「血液型で誰かの性格を判断した」、「血液型のために誰かをからかった」の2つの質問に「1; 全くない~ 4; とてもたくさんある」、の4件法でそれぞれ回答させた。

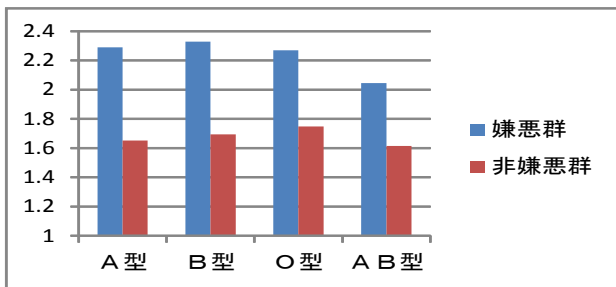


Fig. 12 誰かの性格を判断した
 回答者の血液型の主効果 $F=1.618, df=3/1704, ns$
 嫌いな血液型有無の主効果 $F=108.826, df=1/1704, p<.001$
 交互作用 $F=0.822, df=3/1704, ns$

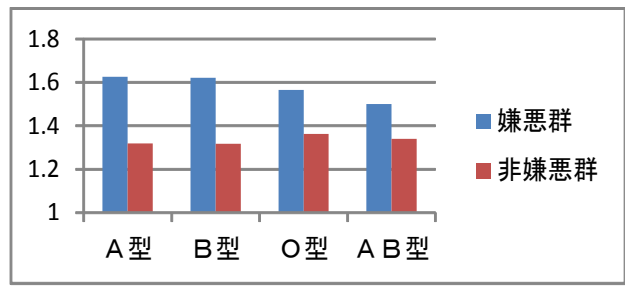


Fig. 13 誰かをからかった
 回答者の血液型の主効果 $F=0.187, df=3/1704, ns$
 嫌いな血液型有無の主効果 $F=27.978, df=1/1704, p<.001$
 交互作用 $F=0.707, df=3/1704, ns$

→血液型で他者の性格を決めつけ、差別しているのは嫌悪群であり特定の血液型ではない。

山岡 (2014)

嫌悪群は血液型性格の話が好きで血液型の話で盛り上がるなど快経験も多いが、
自分も他者から血液型のために否定的に評価されることも多くなる。

他者の性格を血液型で判断するため、自分と相性が悪いとされる血液型やイメージが悪い血液型の人から不快な目に遭わされると対応バイアスで記憶が強化され、その血液型に対する嫌悪感が強くなる。

↓
 ステレオタイプによる自己正当化・嫌悪する血液型への否定的態度の強化

↓
 血液型でからかうなどの攻撃行動

5. 放送倫理・番組向上機構勧告によりTVより血液型性格肯定情報を遮断した効果の検討

効果その1 熟知度・確信度の低下 Fig.1, Fig.2 参照

効果その2 血液型イメージの差の縮小

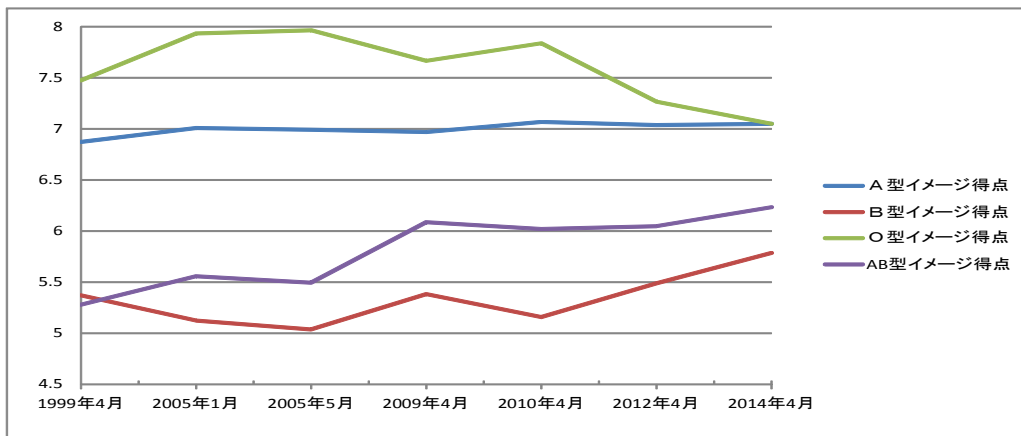


Fig. 14 血液型イメージ得点の変化

2005年5月 2.928
 あったO型とB型の
 イメージ得点の差が、
 2014年4月 1.265
 まで縮小した。

↓
 熟知度・確信度の低下

↓
 TVが血液型高低情報を供給することで拡大した血液型イメージの差であるが、供給が停止されたためにイメージの差が縮小した。

効果その3 血液型差別の変化

2001年から2005年1月の評定値をまとめ2000年代前半、2010年から2014年の評定値をまとめ2010年代前半とした。

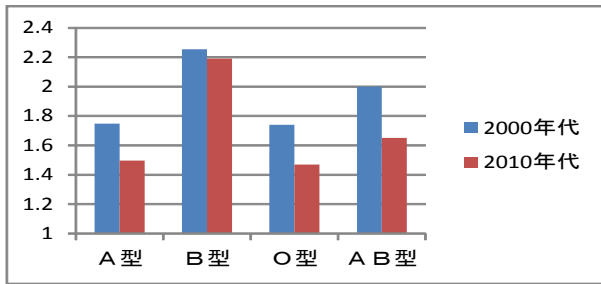


Fig. 15 マスコミ情報が悪かった
 回答者の血液型の主効果 $F=117.130, df=3/4780, p<.001$
 年代の主効果 $F=60.603, df=1/4780, p<.001$
 交互作用 $F=3.835, df=3/4780, p<.01$

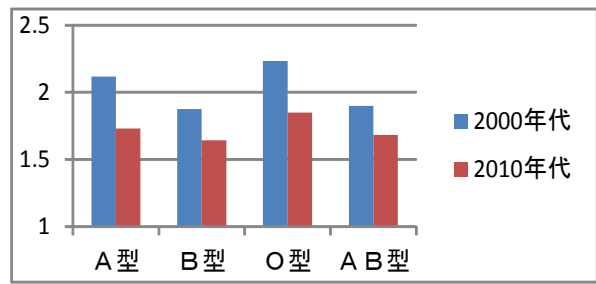


Fig. 16 マスコミ情報が良かった
 回答者の血液型の主効果 $F=22.225, df=3/4779, p<.001$
 年代の主効果 $F=103.103, df=1/4779, p<.001$
 交互作用 $F=2.628, df=3/4779, p<.05$

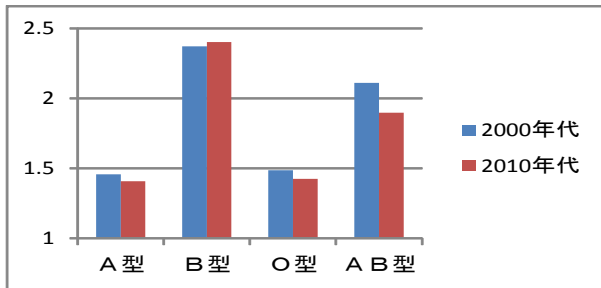


Fig. 17 不快なことを言われた
 回答者の血液型の主効果 $F=321.244, df=3/4782, p<.001$
 年代の主効果 $F=6.396, df=1/4782, p<.05$
 交互作用 $F=2.078, df=3/4782, ns$

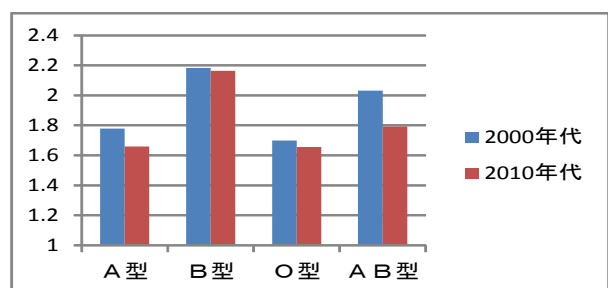


Fig. 18 性格を決めつけられた
 回答者の血液型の主効果 $F=830445, df=3/4779, p<.001$
 年代の主効果 $F=10.607, df=1/4779, p<.01$
 交互作用 $F=1.740, df=3/4779, ns$

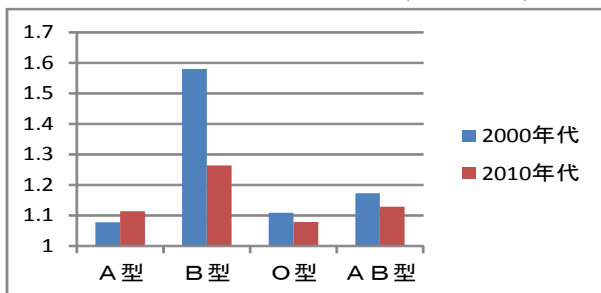


Fig. 19 嫌われた
 回答者の血液型の主効果 $F=81.994, df=3/4778, p<.001$
 年代の主効果 $F=21.115, df=1/4778, p<.001$
 交互作用 $F=20.986, df=3/4778, p<.001$

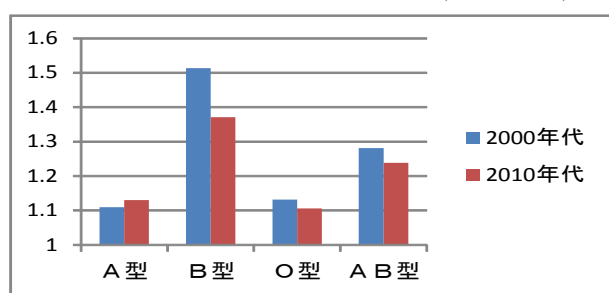


Fig. 20 差別された
 回答者の血液型の主効果 $F=75.563, df=3/4777, p<.001$
 年代の主効果 $F=5.618, df=1/4777, p<.05$
 交互作用 $F=4.042, df=3/4777, p<.01$

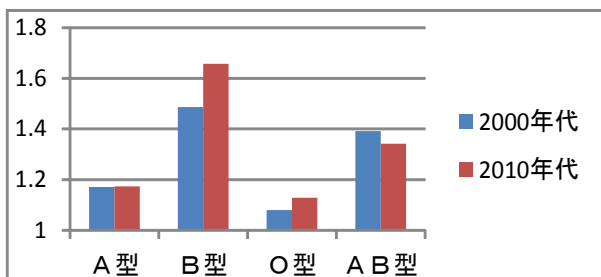


Fig. 21 自分の血液型を言うのがいやだった
 回答者の血液型の主効果 $F=108.069, df=3/4777, p<.001$
 年代の主効果 $F=3.549, df=1/4777, p<.10$
 交互作用 $F=4.205, df=3/4777, p<.01$

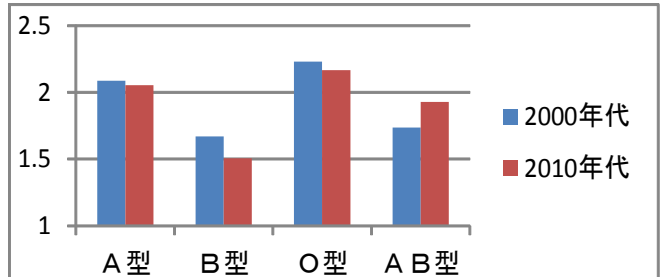


Fig. 22 血液型に関して良いことを言われた
 回答者の血液型の主効果 $F=98.181, df=3/4781, p<.001$
 年代の主効果 $F=0.323, df=1/4781, ns$
 交互作用 $F=4.053, df=3/4781, p<.01$

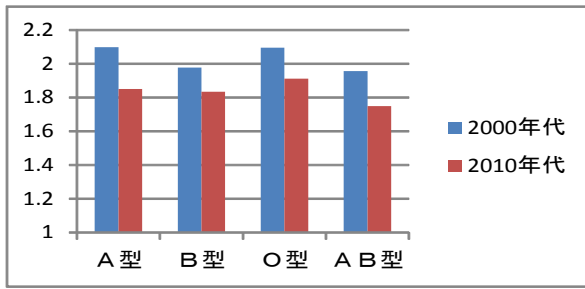


Fig. 23 誰かの性格を判断した

回答者の血液型の主効果 $F=4.038, df=3/4771, p<.01$
 年代の主効果 $F=37.199, df=1/4771, p<.001$
 交互作用 $F=0.711, df=3/4771, ns$

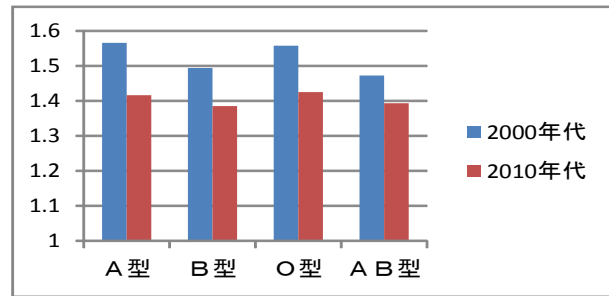


Fig. 24 誰かをからかった

回答者の血液型の主効果 $F=1.470, df=3/4774, ns$
 年代の主効果 $F=18.849, df=1/4774, p<.001$
 交互作用 $F=0.300, df=3/4774, ns$

- 2000年代前半と2010年代前半の血液型差別関連項目を比較したところ、全てで年代の主効果が認められ、2010年代前半の方が2000年代前半とよりも、被害も加害も有意に減少していることが明らかになった。
- しかし依然としてB型のイメージが一番悪く、B型が血液型差別の被害を受けていることは事実である。「自分の血液型を言うのがいやだった」では2010年代前半の方が2000年代前半よりも増加している。B型の否定的イメージが社会に定着していることを示すと解釈できる。
- 2004年12月の放送倫理・番組向上機構の勧告により、血液型性格を露骨に肯定する情報をTV番組が発信することがなくなった。それにより血液型性格の熟知度も確信度も低下し、各血液型性格のイメージの差も減少していることが明らかになった。また血液型差別の被害も禍害も減少していることが確認された。

→ 放送倫理・番組向上機構の勧告には血液型差別を抑制する一定の効果があった。

<まとめ>

1970年代以降、マスコミにより各血液型性格情報が発信され、肯定的イメージの血液型と否定的イメージの血液型を生み出した。それは否定的イメージの血液型に対する差別を生み出した。血液型性格は有害である。

放送倫理・番組向上機構の勧告（一部）

血液型をめぐるこれらの「考え方や見方」を支える根拠は証明されておらず、本人の意思ではどうしようもない血液型で人を分類、価値づけするような考え方は社会的差別に通じる危険がある。血液型判断に対し、大人は“遊び”と一笑に付すこともできるが、判断能力に長けていない子どもたちの間では必ずしもそういうわけにはいかない。こうした番組に接した子どもたちが、血液型は性格を規定するという固定観念を持ってしまおうおそれがある。

青少年委員会は、放送各局に対し、自局の番組基準を遵守し、血液型によって人間の性格が規定されるという見方を助長することのないよう要望する。

BPO勧告により2004年のように露骨に血液型性格を肯定するTV番組は放送されていないようだ。しかしバラエティ番組におけるタレントのトークではタレントが血液型性格を肯定する個人的見解を表明することはある。また、タレントやアニメのキャラクター紹介には星座とともに血液型が記入されていることが定番となっている。これは各血液型性格に対するイメージが漠然としたものであっても日本社会の多くの人に共有されていることを示す。それが2010年代においても「B型の否定的イメージ」が根強く残っていることにつながるのだろう。

引用文献・参考文献

- 浅尾哲朗 2004 血液型と母音と性格 論創社
 浅尾哲朗 2005 血液型と母音でわかる新型性格診断 ブックマン社
 藤田紘一郎 2006 パラサイト式血液型診断 新潮選書
 藤田紘一郎 2008 血液型の暗号 日東書院
 藤田紘一郎 2010 血液型の科学 祥伝社新書
 小塩真司 2011 性格を科学する心理学の話 新曜社
 奈良信雄 2009 血液のふしぎ SoftBank Creative サイエンス・アイ新書
 山本文一郎 2015 ABO血液型がわかる科学 岩波ジュニア新書
 山岡重行 2011 テレビ番組が増幅させる血液型差別 心理学ワールド 52号
 山岡重行 2014 血液型で他者を嫌悪するのはどのような人なのか 日本パーソナリティ心理学第23回大会